

## 昭和52年（一九七七）

- 11月5日 広島市の古書市会へ理工経等の専門書を出品。出席者十八名で盛会。
- 11月6日 県境の平家岳へ登る。この日「八イキングガイド」の発行を思いつく。
- 11月8日 柳井市の琴石山へ登る。
- 11月9日 山口行。三坂圭治、石川卓美、国守進、高橋文雄の諸氏を訪問。
- 『防長地下上申』の仕事は予想外に進行中。
- 11月10日 山口行。
- 11月12日 早朝より県境の寂地山へ登る。
- 11月14日 朝東京着。地方・小出版流通センターの有北氏、秋田県秋田書房の篠内氏と昼食。古書通信社へ八木福次郎氏を訪問。神田古書街を散策の後、日本観光文化研究所へ宮本常一氏を訪れ、当方の企画編集の姿勢の安易さを指摘される。夜十時帰徳。
- 九月に東北方面を見学した頃とは様相一変。出版、小売、古書業界とも曲り角に立っているようだ。
- 11月15日 山口行。山口大学農学部教授の中
- 山清次氏より『無角和種作出の経営経済的研究』の原稿を預かる。和牛についての貴重な研究書である。
- 11月20日 久しぶりに一日中店へ。たまにか居ないので、日ごろ来店されるお方には本当に申しわけなく思っている。
- 11月23日 県北の馬糞ヶ岳へ、頂上は雪。
- 11月25日 山口へ萩行。
- 11月26日 全集物の在庫が百点を越えたので、文学関係などを値下げ。
- 11月27日 県境の弟見山へ登る。
- 12月1日 大島郡の文珠へ嘉納源明三仙を縦走。帰途『月性の研究』出版の件で元大畠町長の森本常雄氏を訪問、了解を得る。
- 12月4日 羅漢山へ。クルマの距離は長いの、山頂まで徒歩一時間は近すぎて「ガイド」の対象とならず。
- 12月5日 広島にて古書市会。
- 12月7日 山口市で所用をすませ、午後、東へ西方便山を縦走。新道を発見。
- クルマのメーターが十七万キロを越えた。免許をとって五年半なので、年間平均三万余キロ。もちろん無事故である。
- 12月10日 一年ぶりに小倉の古書市会へ。年末の市らしく値は高いけれど
- 12月11日 終日店番。文庫本と小説ばかり動く。雑誌をおけばさぞ売れよう。
- 12月12日 昨日『ジャポニカ大日本百科事典』を五万五千円に下げたら、本日二組売れた。お客は実によく見ている。夜、自宅にて店のささやかな忘年会。
- 12月13日 鶴の里・八代より烏帽子ヶ岳へ登る。夕方「マツノ通信」の原稿をやっと完成、印刷所へ渡す。
- 12月17日 夜、店の二階にて読書グループ「つれづれの会」の忘年会。出席者15名。本年度読んだテキスト22冊の中から選ばれたベスト3は、大岡昇平『野火』 エリカ・ジョング『飛ぶのが怖い』 ミヒヤエル・エンデル『モモ』であった。

## 昭和五三年（一九七八）

を押し、二百余冊を発送。

1月16日 今春刊行予定の拙著『周防の山歩  
き』は、不出来につき印刷寸前で出版を延期。

何十回も登った山も多く、しかもわずか三十  
頁の小冊子なのに……。自分の無能、出版の恐  
ろしさ、そしてまた執筆者諸家のご苦労を身  
にしみて感じる。

1月18日 「マツノ通信」第6号出来。開い  
てアツと驚く。大見出し、花の命は短かくて  
”の「か」は不要なのだ。いつまでたっても  
編集者失格である。

1月19日 「マツノ通信」など約千五百通を  
発送。

1月20日 長府で買入れの後、豊北町へ。

『見島と鯨』の著者多田穂波氏を訪問。『明治  
期山口県捕鯨史の研究』の原稿をいただく。  
店へは、昨日発送した古書目録のことで電話、  
来訪多し。

1月22日 夜、光市隣保館にて「周防猿まわ  
しの会」の旗揚げを兼ね、宮本常一氏の講演。

1月26日 『久坂玄瑞全集』出来。限定番号

也。

夜、店の二階で読書グループ「つれづれの  
会」。19年にわたり月二回の集いに皆勤してき  
たが、今夜で責任者の座を22歳の女流詩人へ  
譲り、世代交代的一幕。

1月27日 山口行。山口女子大学学長田中晃  
氏より原稿をいただく。

1月28日 岩国の徴古館へ宮田伊津美氏を訪  
れ『岩国藩諸隊史料集』の打ち合わせ。

夕方、「阪急古書のまち」の間島保夫氏来訪。  
大阪の古本屋は、わずか5%のマージンでも  
積極的に売買する由。

1月30日 博多行。「地方出版の雄」葦書房  
を初めて訪れ、教えを受ける。同じ福岡市の  
古書店にも同名の葦書房あり、もちろん全く  
別人の経営であるが、こちらも非常に活発。

2月2日 雪について山口、萩方面へ。

2月5日 広島市の古書市会へ出席。

2月10日 津和野へ沖本常吉氏を訪れ『幕末  
淫祀論叢』の原稿をいただく。『於村呂我中  
亀井茲監伝』復刻の話もすすむ。

帰途、山口の第三書房にて、これまた復刻  
候補の稀書『豊浦郡水産史』を購入。三万円

2月15日 十三日から京都へ東京を見学。地  
方・小出版流通センターの川上賢一氏に会い、  
近く小店で県内初の「地方出版物フェア」開  
催を決定。

2月21日 山口行。山口農業高校の伊藤彰氏  
より『防長紀行シリーズ 海辺の民俗』の原稿  
をいただく。

2月24日 下関から大島郡の端まで、この二  
日間に仕事で約六百キロを走る。

4月 日 久しぶりに休みをとり、一月中旬  
からの来信に返事を書く。怠慢である。一年  
も前から依頼されていた朝日新聞の「やまぐ  
ち随想」もようやく脱稿。わずか一四〇〇字  
なのに……。

それにしても、本屋がろくに本を読まず、  
文章も書けないような生活をしていたのでは、  
いづれ報いがくる。しかし現在のペースだけ  
はなんとか踏みこたえたいと懸命。原稿をお  
預かりしている各著者に実情をありのままに  
申しのべ、延期の了解を願う手紙を書く。

4月×日 山口市にて『防長地下上申』の編  
集委員会。原本校訂の作業はたいへんらしい。

帰途、防府の毛利博物館にて臼杵館長より毛利家文庫所蔵『長井雅楽詳伝』脱隊暴動一件紀事材料』の出版許可をいただく。

4月 日 二週間にわたる「地方出版物フェア」を終了。県外の本は七百冊預かり、約二百冊売れた。大都会の新刊店なら五割は売れよう。よく売れたのは地域性の少ない出版物  
4月×日 この十日間に三度も広島行。広島大学文学部部長 松岡久人氏編の論文集『内海地域社会の史的研究』の出版を引き受ける。

4月 日 朝日新聞(山口版)のベストセラー欄(山口市文栄堂調べ)に、中央の出版物を押しえて珍しくも小社発行の『山口県地名考』が二週間連続第一位となっている。本書は二千部を印刷。二か月間に県内だけで千五百部売れた。はたして、うち続く火車操業への力ンフルになるか。

4月×日 朝突然、北海道大学の田中彰氏来訪。親しく激励のお言葉を賜わる。『脱隊暴動一件紀事材料』への解説等をお願いし、指示を受ける。

4月 日 『防長動植物方言考』への予約が、わずか一七〇冊しか来ていない。パンフの印

刷ミスを中心に悔い、涙をのんで、六〇〇部印刷の予定を三五〇部に減らす。一茎の草、一匹の虫の呼び名にも里人の心を偲びつつ、山口県の一隅で黙々と蒐集整理された、比類のないこの研究は、資料としてはもちろん、読物としても、山口県の風土や文化を愛する人、また文芸愛好家の座右に不可欠の貴重書。残部は必ず売り尽すと腹をきめた。いずれ古書価も出よう。

4月×日 山口市に土井彌太郎氏を訪問、『山口県大島郡 ハワイ移民史』のまとめをお願いする。

4月 日 長らく徳山市に居ながら、地元についての出版をほとんどしていないので、若い人たちに徳山の歴史や風土を見なおしてもらえるような本の出版を企画。玉野知之、小川宣の両氏に相談をもちかける。

4月×日 山口へ萩へ長門市を巡り、夜九時帰徳。週一度の出張では、昼・夕食抜きで駆けずりまわるのに、仕事は半分も片づかない。  
4月 日 昨日以来、宮本常一氏および、『やきもの風土記』の著者・神崎宣武氏のお供で、防府市の佐野焼、毛利博物館館長・臼杵華臣

氏、光市の周防猿まわしの会会長・村崎義正氏などを訪問。いろいろと耳学問をさせてもらう。

4月×日 多忙のため、ついに伊藤彰氏の『海辺の民俗』の刊行も延期となる。

5月 日 京都に奈良本辰也氏を訪問。『長井雅楽詳伝』への解説をお願いする。京都大学の海原徹氏に『近世防長の教育』の執筆を依頼。  
8月1日 この二年半、古書部と経理を委せていた金子喜昭君が、独立のため急に六月末で店をやめた。いそがしくても古書・出版とも自分一人で行う方が気楽なので、代わりは入れないことにした。

8月5日 年一回の道楽で、四日間信州へ遊ぶ。山は初秋であった。  
8月8日 光市へ『防長回天史』(元版)を配達。先日は下松市の若い人が『近世日本国民史』(全101巻)を買ってくれた。こうしたユニークな本は、なぜか市外にはかり売れているようだ。このところ夏休みのせいもあって、県外からの来客多し。

8月10日 津和野の沖本常吉氏と、下関の住

吉神社へ阪本健一氏を訪問。帰途、長府と宇部にて古書を買入。

阿川与一氏にお願いしてあった『山県周南文集』の訓み下しが出来た。これまた貴重な労作である。

8月12日 岩国の旧家で炎天下の蔵ざらえ。

汗だくになって昔の本をクルマ一杯買つ。

8月14日 下関赤間書房の藤野幸平氏来。

このたびの自著『ありとしも - ひとり出版社の十年』の刊行を最後に、老齢のため出版業をやめられる由。県内出版社の草分けだけに、その引退は惜しまれる。

8月18日 山口行。朝日新聞の松葉一清氏より、同紙に連載された『やまぐち建築ノート』の決定稿をいただく。

夜、湯田にて中山清次著『無角和種作出の経営経済的研究』の内輪の出版記念会。本書は八部を印刷、予想を上まわる好評で、すでに四〇部を残すのみ。

8月30日 山口、萩、美祿市へ買入れ。

小生の作成したハイキングガイド『周防の山歩き』は、今秋の朝日新聞(山口版)に連載されることになった。仕上げのため、九月

からは、いやでも毎週一回は山を歩かねばなるまい。

夜、『明治期山口県捕鯨史の研究』を校了。

9月8日 防府の右田岳へ。時間不足のため頂上寸前で引き返し、防府市内で買入れ二件。

9月10日 金子君は、山口駅前通りへ本日より古書店「かねこ書房」を開業。

9月13日 不況のせいか、このところ買入れ

ばかり多く、全集物が店にあふれてきたので、『校本萬葉集』ほか三十数点の揃物を東京の大会へ出品。

店の仕事も楽しいが、ただひとつ、お客様の顔をよくまちがえるので困る。むかし貸本

屋時代には若い女性のお客が多く、片っぱし

からみんな頭に入ったものだが……。

12月1日 『防長地下上申』(第一巻)が出来た。三年前に本書の出版を企画して以来、

幾多の紆余曲折と、三坂圭治氏ほか編集委員

の並々ならぬご苦労の結果、ようやく刊行の運びとなり感無量。さっそく発送する。予約

四二〇冊中、県外からは八冊であった。

12月8日 山口放送の「善行者表彰」とやらの副賞で、二週間のヨーロッパ招待旅行をさ

せてもらっていた父が、無事に帰ってきた。

この賞、一昨年は『山口県方言辞典』の著者

山中六彦氏、そして昨年は山口県地方史学会

会長の三坂圭治氏というお歴々が受けられたもので、なんとも面はゆい限りである。

12月12日 古書・出版に転業して以来初の社員旅行。店を二日休み、全員四名で東京。駆

け足で書店見学をした。「どんな本でも揃って

いる」という例の八重洲ブックセンターである。小社の出版物は、小社に在庫のあ

る三十数点中、企画ミス等でいまは人目にさらしたくない本二冊だけが並べてあった。売

れた本の補充が全くなされていない証拠である。流通機構が最も進んでいるといわれる店

にしてこの有様。やはり新刊屋をあてにした

出版はできない。

12月13日 三年前、島根県の産地からとり寄せた大きなケヤキの板に、「古書買受処」の字

を彫り込んだ看板がやっと完成。わが店には重厚すぎ、置き場に困っている。

12月14日 読書グループ「つれづれの会」の

忘年会。今年読んだテキスト20冊の中から皆で選んだベスト3は、神崎宣武著『やきも

の風土記』 上野英信著『糜鉞譜』 フロー

ベル著『ボヴァリー夫人』であった。

12月20日 この十月に刊行した『明治期山口県捕鯨史の研究』が朝日新聞（全国版）の読書欄で、また読売新聞（山口版）には五段抜きで大きく紹介されたが、それらの記事による注文は朝・読とも各一冊。この五年間、分不相応の経費を注ぎ込んだわが直販ルートも、どうやら完成の域に達したとみるべきか。

12月23日 年賀状約二千通を発送。

12月31日 今秋以来、好きな山行もやめ、すべてを仕事に集中しているのに、古書の買入れや配達、出版の企画・編集・校正・PRなどに次々と追われ、お世話になった諸先生やお得意様への礼状の一通も書けないまま、今年も苛立だしく暮れてゆく。ほんとうに申しわけない思いである。

## 昭和54年（一九七九）

8月 日 大徳山夏祭りとやらで人出は多いが、店はまるでヒマ。夏にかぎらず、お祭り騒ぎと読書とは縁がないらしい。

8月×日 長門市の山中にたった一人でもこり、両親を殺された原爆への怨念を描きつつけている青年画家・殿敷侃氏を訪れ、『萩住民運動史』のカバーデザインを依頼。

帰途、その本の編者である萩民報社主幹の伊東祐基氏に会う。これまた強烈な個性の人の県内では珍しいこの野史は十一月刊行の予定。千円前後の本になるう。

8月 日 お盆を過ぎると、さすがに店の客足もふえる。しかし今夏は売買ともに小口が多く、均一本ばかり動くような気がする。

8月×日 大日本印刷の初仕事、『山口県地名考』正統二点がいちどに入荷した。正篇は再版、続篇は初版である。このところ大日本印刷、凸版印刷、そして中国地方の大手、大村印刷、瞬報社と四社からの信頼が厚く、とても仕事がやりやすい。

9月 日 『山口県地名考』のDM八ガキ約三

千通を発送。地名といえば、恥ずかしいのはわが徳山市の新町名である。銀座、新宿、有楽町、代々木、千代田、青山、晴海埠頭などがあり、来春には原宿まで登場するといふ。ある調査によれば、東京と同一と思われる町名は市内に二十以上もあるとか。東京地名が日本一多い街だろう。代々小路は代々木に、今宿は新宿にされ、寺町、夕顔町、順庵町などのゆかしい地名はとくに消え去ってしまった。石油コンビナートと東京地名にとり囲まれて、地方出版を続けてゆくこの張り合い！

9月×日 『防長地下上申』（第二巻）の注文が今日で四〇〇冊を越え、ひと安心。しかし五〇冊は売れないと印刷費、印税が出ないのだ。

9月 日 自信をもって作った『やまぐち建築ノート』の県内での売れゆきがいまひとつパツとしない。定価のせいでないことは、おなじ二千円台の『防長百山』や『山口県地名考』がとてもよく売れたことでもわかる。その理由の一半は題名の硬さにもあるようだ。「建築ノート？」ああ建築の本か……！と見過

ごされるのであろう。新聞連載のタイトルをそのままとらず、『やまぐち建築ノート-洋風

建築の語る山口県近代史』とでもしておけば

よかった。それにしても本書は県外ではよく

売れており、識者の評判も上々。こういう本

が売れないのも山口県の特長であろうか。

9月 日 今春、仕事中に右足を骨折、手術

のさい金属で補強していた箇所が、この二、

三日、化膿発熱したため、緊急入院し再手術。

これでまた、あらゆる仕事が一週間はおくれ

る。

9月×日 『山口県地名考』を正統そろえて三

十五組もマスコミ関係へ送ったのに、ほとん

ど黙殺されたようだ。正篇のときはあれほど

もてはやされたのに。継続こそ最大の美德

だと信じてきたが、マスコミでは逆らしい。

10月 日 足の傷もようやく完治し、明日か

ら四日間、今西錦司氏の山登りのお伴で、県

内をクルマで駆けまわることになった。

今年は、予期せぬ足の故障で八か月間も泣

かされた。来年は頑張りなくては……。

## 昭和五五年（一九八〇）

4月 日 一九七四年から出版を始め、昨年

末までにちょうど五十点を刊行してきたが、

労多くして財政はますます「火車」になって

いくので、今年からは出版点数を年間五六十

点にへらし、その分だけ古本部を充実させ

ようかと思っている。といつても他の分野は

ダメなので、山口県史料の収集にこれまで以

上力を入れることになろう。

欲を出さなくても損をしてしまう「地方出

版」にくらべ、「いなか古本屋」の仕事は、少

なくとも欲さえ出さなければ気楽なものであ

る。

4月×日 聞くところによると、稀観本とし

て県外にも呼び声高い『萩藩閥閥録』を、広

島県のある印刷業者が無断で復刻し、山口県

文書館に始末書をとられたという。この海賊

版、印刷所ですでに一冊残らず焼き捨てた

と言っているそうだが、プレミアム付きは覚

悟の上で、何とか入手したいものである。ちな

みに、原本はA5判なのに、この海賊版はそ

れをB5判に拡大している。

4月 日 岩国、宇部、そして島根県の浜田

からも、トラック便などで古書がたくさん届

き忙しい。すぐ電話で買値を交渉し、送金す

る。

4月×日 久しぶりに上京。五日間にわたり、

山口県史料を求めて、神田、本郷、早稲田界

隈から中央線沿線を八王子まで行ったが収穫

は少なく、この半年間の値上がりに驚くばか

り。

神田のある古本屋では福本義亮編『松下村

塾の偉人久坂玄瑞』が何と二万八千円につい

ている。本書のミスプリント約一千か所を修

正し、小社から改題復刻した『久坂玄瑞全集』

は、まだ定価七千五百円で入手できるという

のに……。

4月 日 岩波書店を訪ね、数ある松陰研究

書の白眉、玖村敏雄著『吉田松陰』の復刻許

可を申し込む。玖村氏はわが徳山市出身の教

育学者。

4月×日 古書組合の全連総会で熱海へ。出

席者四十名の内訳は、東京周辺、名古屋、京

阪神の業者がほとんどで、それ以外の三十八

県からはわずかに四名。「地方の時代」の掛け声とは逆に、古書業界の中央集権化はますます強まり、同時に東京都内の業者間の格差も広がりつつあるようだ。

5月 日 本紙の古書目録づくり。先号が市町村史だったのでそれを除くと、どうしても「偉人伝」ばかり集まっており、文学・教育・宗教・民俗・社会などに関する本は少ない。幕末以後の山口県に生まれた有能な人材は、すべて長州閥をたどって政治家や軍人になっただけで、他の分野での活躍の記録が目立たないのはいささか寂しい。それにしても、現在のスペースでは、せっかく集めた本が入りきれない。次号からは増頁しよう。

8月 日 生誕百五十周年を記念して県内はちよつとした松陰ブーム。山口市や萩市では多彩な行事が催され、朝日新聞（山口版）まで「松陰の言葉」を長期連載している。ちよつと岩波書店から『吉田松陰』の復刻許可もおりているけれど、便乗出版は嫌いなので来年にしよう。

9月×日 『幕末・明治萩城下見聞録』の校正。といってもユーモアを交えた体験記やエピソード

の面白さに引きずられ、つい先へ先へと読み進むので、仕事にはならない。本書は山口県の歴史書としては異例の、庶民生活を描いた名著として評判を呼ぶと思う。

9月 日 古本屋の市会で新品の『バツ八全集』（筑摩書房LPレコード37枚入 定価七万四千円）をひやかし半分に入札したら、古本屋はレコードに興味がないらしく、何と一万二千円で買えた。喜んで持ち帰り、参考までに東京の大きな古レコード屋に買値を聞くと、新品でも六千円くらいとかで二度びっくり。この全集のレコードはすべて、権威ある西独アルヒーヴ盤、本でいえば岩波版と同じなのに……。岩波書店の全集なら、古本屋は喜んで定価の半額平均には買うであろう。やはり本は有難いものなのだ。

9月×日 就職シーズンで、地元はもとより、遠く筑波大学あたりからも国史や民俗学専攻の女子大生が売りこみに来る。たいへん有難いけれども、小社は出版部と古書部に各二名の女性パートが居るだけで、今のところ欠員はなく、また出版部といっても、このQ生の仕事以外は経理、発送、雑用くらいで、専門

知識を生かす場は皆無に近いのだ。

9月 日 古書の買入れにいく。「電話の声では四十歳くらいかと思ったが、見れば意外とお若いんですね」と言われた。これはまだ良いいほうで、以前ある先生を初めて訪問したときなど、私が玄関へ入って行ったのに、先生は私のうしろをじつと見つめておられる。私は丁稚で、主人はその後から入ってくるとばかり思っていたとのこと。当方これでもれっきとした昭和一ケタ生まれなのに、なぜか歴史物の本屋らしいずっしりとした貫録がつかないのである。

9月×日 中・四国の地方出版社を代表？して『地方出版論』の分担執筆を依頼され、仕事も休日もいっさい返上して四苦八苦、三週間もかかってようやく書き上げたと思ったら、明日からは招かざる客、税務署が来るという。世の中で経理ほど苦手なものはないのに、一難去ってまた一難とはこのことか。

9月 日 神田の大会へ。全集揃物の値下がり目は目を覆うばかりで、専門書も、価格の自由化を待つまでもなく中小出版社のダンピングは漸増し、買い控えの傾向大。一部の古

書を除き、供給過多の時代に入ったらしい。

古書店の閑散を尻目に、新築成った壮麗な八階建のポルノ専門書店だけは、すぐ近所にある支店をも含めて終日大にぎわい。これぞ神田の、いや現代日本の象徴なり。

9月×日 十五日間にわたる激しい攻防のすえ、税務署側はついに一円の追徴金をも得ることなく撤退した。どうにも取りようがなかったのか、「こんな仕事をよくやる」といわれ、税務署員からも引導を渡された一幕。

12月 日 『近世防長諸家系図綜覧』の発送を終えほっとしているところへ、二年前に倒産した本書の版元、防長新聞社の権利を受け継いだと称する男から「本書を無断復刻したので告訴する」との電話があり、とりあえず岩国まで挨拶にいく。

本書の著作権についてはすでに万全の手続きを終えているのに、こちらが下手に出ればつけ上がって悪者扱い。あまりにも言葉が過ぎるので、差し出した酒二本をまた引っ込めて持ち帰った。こういう輩やからの仕事場にも、大きな松陰像が置いてあるのが印象に残った。

12月×日 本年最後の出張買入。朝から下関

へ行き、保存の良い現代小説を約八百冊買い、クルマが一ぱいになる。店が県内でも最も繁華な場所であり、こうした小説類はよく動くのである。

12月 日 今年もついに得意の皆様に賀状を書くひまもなく暮れてゆく。しかし出版点数を例年の九点から六点到減らし、そのうち三点は復刻本なので、実質的には半分も仕事をしなかったせいか、どうやら、印刷所へもあまり不義理をすることなく新年を迎えることができそうである。仕事をしないほど財布が楽になる。これは地方出版の宿命なのか、それとも適正規模というものであるうか。来年も「勝たんとうつぶべからず、負けじとうつぶせなり」(徒然草)をモットーに、徹底した守備型の、地道な経営を続けたい。